

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	CHENG Jianmin
学位	博士（文学）
学位記番号	新大院博(文)第67号
学位授与の日付	令和5年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	近世越後における文人研究 —中国古典の受容を中心に—
論文審査委員	主査 教授 岡村 浩 副査 准教授 廣部 俊也 副査 准教授 土屋 太祐

### 博士論文の要旨

本論文は日本近世における中国古典の「中央」から「地方」への伝播の実態と、地方における中国古典の受容の詳細を明らかにすることを目的とし、越後ゆかりの代表的な文人に着目して考察するものである。そのために先行研究を参考にしつつ、新たなる資料を実地調査の中から見出し、独自の観点での論述を展開している。

本論文は、以下のとおり構成されている。

序章では、日本における各時代の中国古典の受容の様子を、諸資料から探っている。はじめ近世以前では、遣唐使や留学生が将来した漢籍の利用が、天皇や貴族など極一部の階層に限られ、日本国内にあまり普及しなかった。それに対して江戸時代に入ると、徳川幕府の文教政策や出版技術の発展によって、諸国の藩校や郷学私塾にまで隆盛した有様がうかがえるようになる。本題に入る前、従前の日本の中国古典の受容をこのように記述している。

第一章では、近世来越文人の諸相を時代順に追究し、元禄期（1680～1709）から安永・天明期までは来越者の多くが俳人であったのに対して、天明期（1781～1789）以降、寛政期にかけては漢詩人や画家が主流であったことを、事例を示しつつ明らかにした。次に、数多くいる来越文人の中で、江戸の儒学者・亀田鵬斎（1752～1826）を代表人物として取り上げている。その理由は、何時・何処で誰のために揮毫したものを落款に記入した遺墨が県下各地に散見されることによる。そこで彼の来越における文芸活動を巡り、中央文化の地方に対する普及経路の一端を明らかにした。とくに江戸後期の新潟を代表する南画家・石川侃斎（1764～1840）との合作について新出資料と従来の両者の事績を見比べながら、鵬斎の越後の足跡がより明らかにできた。また侃斎を通して、地方文人の中国文化の摂取法を具体的に挙示している。

第二章では、中央へ学びに赴き、のち帰郷した儒学者が開いた漢学塾で教育を受け、また自ら

諸国遊歴を通して知識を習得した越後人の中国古典の受容例について、当地の代表的な文人・良寛（1758～1831）の漢詩作品を巡って分析を行った。まず第一節において、良寛の文芸の基礎を培ったものを追究した。蒐集した諸文献の解読によると、良寛の漢学の知識は、主に少年時代に通った大森子陽塾や壮年期に修行した円通寺において習得したと推知される。続く第二節では、先行研究を参照しながら、良寛詩における中国古典の影響を具体的に考察した。考察の密度を高めるべく、とくに『寒山詩』と『唐詩選』からの影響の有無を主とし、語句の使用法例の分析に努めている。さらに第三節では、良寛詩における中国古典の受容に留まらず、中日思想の比較の視点からその詩作における隠逸思想の存在を解明した。

第三章では、越後人の中国古典の受容について、良寛と並ぶもうひとりの雪国の文人・鈴木牧之（1770～1842）を取り上げ、文芸作品の分析を行った。まず第一節では、牧之の文芸の基礎的内容を追究した。彼自筆の『夜職草』や『永世記録集』によれば、その漢文の素養は幼少時代に通っていた付近の大運寺で習得したものである。さらに寺子屋を出てから与板徳昌寺の住職・虎斑に作詩の基本を学び、漢文の知識向上に一層精進した。加えて画を独学ののち、来遊作家の狩野梅笑に師事したことで、山水や花鳥図にも巧みさを示した。このように幼少期からの教育経験を通覧し、牧之の文芸の力量が長い時間をかけ、様々な体験に基づき蓄積されたことに言及している。次に第二節では、牧之の「水鳥之図」「鍾馗之図」、三作の「山水図」、合計五作を考察することで、彼の画作における中国文芸の影響について論述している。第三節では、牧之の代表作『北越雪譜』における中国古典の受容を具体的に指摘している。『五雜俎』『左伝』『詩経』『山海経』『本草綱目』をはじめ、それらは幅広い内容にわたり、量も計十数種類に上るものであると明記している。

以上の考察に基づき、終章においては各章の重点を順を追って振り返り、言及の流れを整理している。概要を記すと、日本近世における中国古典の受容には大別して三通りがあり、①中央の人物によって地方にもたらされた例。もたらした側の代表に亀田鵬斎を取り上げた意義は、儒学のみならず詩書画三絶をうたわれた総合的力量を持ち、弟子の多くに越人がいて、それらの人との接点を探ることで当時の越後の文化水準を垣間見ることができることによる。②越後にもたらされた中国文化を地方に居ながら享受した例の代表に良寛を取り上げた意義は、日本を代表する文人と評される人物の独自の文芸の裏側に、中国文化の影響が色濃いことを指摘するねらいからである。③著名な中央文人との直接的交流を求め、生涯をかけて文芸上の足跡を残そうとした人物として鈴木牧之を取り上げた意義は、近世越後の文芸の担い手には地主層や富裕な商家が多く、それらが地域文化を牽引したことを明らかにするねらいからである。その代表として牧之の考察を行った。

まとめの記述に続く文末では、中国古典受容以降、日本で誕生した学問文化についても引き続き研究を試みたいと綴る。

#### 審査結果の要旨

本論文では、序章から始まり、本文が全三章に止まる。この点につき、分量が若干不足していると見られなくもない。これについては、考察の対象とした三人の文人を各章内でまとめあげる

構成を取ったため、各章ごとの考察は十分行われている。その結果、三者三様の中国文化摂取の態度の詳細を追究し得た。本論文の結論部で特筆すべきは、「幕府の文教政策の影響を受け、江戸時代では漢学が地方の知識人たちにまで浸透していった一方、日本独自の嗜好による学問として発展した傾向が、第二章の良寛詩作における隠逸思想の分析からもうかがえた」と記述している点であろう。

なお、本論文は当初鈴木牧之を中心に考察する計画であったが、『北越雪譜』研究者・高橋実氏の先行研究の事績が大きく、牧之のみでは十分な独自の研究成果をあげるのが難しいと判断した結果、加えて二人の文人を並列して考察対象とし、時代と地域性を意識した論述を試みることとなった。したがって一定の時間内で三人をまんべんなく考察しようとする余り、部分的にやや資料蒐集に不満足箇所もある。

しかしながら本論文における高く評価すべき点は少なくない。鵬斎の考察では先行研究の杉村英治氏の調査にもれた新出資料を見出し、その分析を論文の表題通りの視点で行い、たとえば江戸後期の新潟南画家を代表する石川侃斎との合作「謁弥彦神廟」の画讃が、その画題にふさわしい中国古典を典故にする詩を転用したものであることの解明や、鈴木牧之入手の鵬斎詩もまた、大半が中国古典の転用であったことの指摘を行い、かつ作品収蔵先の鈴木牧之記念館(南魚沼市)での展示用のキャプション(肉筆の解説・書き下し文)の誤りを正すなど、一般に益することからも本研究はつながっている。

考察の手法は全て原資料を実見した上でのもので、論文巻末に付した石川侃斎、鈴木牧之の作品データ自体も今後近世文人研究を志す人々にとり、有益な資料になろう。

良寛への言及も他者の詩の解釈とは異なり、良寛の作詩態度の底流に中国のものと違った隠逸思想の内含があることを明らかにした。これは江戸期の日本独自の学問嗜好の一端とよいためであるとの指摘も、この時代の文芸を考察する新しい方向性として本論文を高く評価したい点である。

本論文は亀田鵬斎・良寛・鈴木牧之三者の遺作中、その漢詩および俳諧の箇所にもみられる中国古典の存在を追究した内容で、日中双方の詩句の解明を丁寧に重ねて行うことによってまとめられたものがある。中国古典に関する教養を活用しつつ、近世江戸詩壇、俳諧文芸の一端をよく分析し、著者ならではの文学観の表出も認めることができ、今後さらなる展開も期待される。そのことから、本論文は、博士(文学)の学位を授与することが適切である。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断した。